三下『十二支と月のよび名』（97ページ）

まなびリンク

きせつと言葉

八節（立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至）

俳句にはきせつを表す言葉、「季語」があるということを学んできました。しかし、「春」がいつからいつまでなのかは、自然の中ではっきり決まっているわけではありません。そこで、昔の人たちは「八節」という、きせつの始まりとなる日と、それぞれのきせつの中間の日をもうけていました。

春

立春……二月四日ごろ。この日から「立夏」の前の日までが「春」となります。

春分……三月二十一日ごろ。昼と夜の長さがほぼ同じになる日です。「春」の中間の日にあたります。

夏

立夏……五月六日ごろ。この日から「立秋」の前の日までが「夏」となります。

夏至……六月二十一日ごろ。一年でいちばん昼の時間が長い日です。「夏」の中間の日にあたります。

秋

立秋……八月七日ごろ。この日から「立冬」の前の日までが「秋」となります。

秋分……九月二十三日ごろ。「春分」と同じで、昼と夜の長さがほぼ同じになる日です。「秋」の中間の日にあたります。

冬

立冬……十一月七日ごろ。この日から「立春」の前の日までが「冬」となります。

冬至……十二月二十二日ごろ。一年でいちばん夜の時間が長い日です。「冬」の中間の日にあたります。この日には、かぼちゃを食べたり、ゆず湯に入ったりする習慣があります。

年中行事

日本各地では、きせつによってさまざまな「年中行事」が行われ、人々はきせつのおとずれや変化を、生活の中で感じとっています。

七草がゆ　一月七日。「七草」の入ったおかゆを食べる習慣があります。お正月においしいものを食べすぎるので、おなかを休めるためともいわれています。「七草」とは、「せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ」の七しゅるいの植物のことです。これをふつうは「春の七草」といいます。また、「秋の七草」もあります。「はぎ・あさがお・くず・おみなえし・ふじばかま・おばな・なでしこ」です。

節分　二月三日ごろ。「立春」の前の日にあたります。「冬」と「春」を分ける日にあたることから、きせつを分ける日ということで、「節分」といいます。昔は、四季ごとに「節分」がありましたが、今では、立春の前日のことだけをさします。豆まきをしたり、いわしの頭をやいて、ひいらぎのえだにさして、家の入り口にかけたりする習慣があります。新しいきせつをむかえ、わるいものを追いはらい、ふくをよび入れようというねがいがこめられているといわれています。

ひな祭り　三月三日。「もものせっく」ともいいます。女の子の成長をいわってひな人形やももの花をかざり、白酒を飲んだり、さくらもちやひなあられを食べたりする習慣があります。

八十八夜　五月二日ごろ。立春から数えて八十八日めのことです。あたたかくなってきてはいますが、しもがおりて作物の新芽にひがいが出ることがあるため、注意を知らせる役目があります。また、この日につまれたお茶を飲むと長生きするともいわれています。

あさがお（かわりに「ききょう」をいれることもある。）

たんごのせっく　五月五日。男の子の成長をいわってこいのぼりをあげたり、武者人形をかざったりする習慣があります。また、ちまきやかしわもちを食べたり、しょうぶ湯に入ったりするところもあります。

七夕　七月七日。一年に一度、この日にはひこ星（けんぎゅう星）とおりひめ星（しょくじょ星）が、天の川をわたって出会うことができるという、中国の言いつたえがもとになったといわれています。たんざくにねがいごとを書いて、ささにかざる習慣があります。

二百十日　九月一日ごろ。立春から数えて二百十日めの日です。いねの開花の時期で台風がきやすいころなので、農家の人々にはよくないことがおこる日としておそれられていました。

月見　昔は、八月十五日の夜の月を「中秋の名月」として、すすきをかざり、月見だんごや里いもなどをそなえて、月を見て楽しんでいました。今の、九月のおわりから十月のはじめごろにあたります。

七五三　十一月十五日。三さい・五さい・七さいになった子どもの成長をいわいます。昔は、小さいころに病気などにかかることが多く、七さいまで元気に育つということはとても大変なことでした。そこで、三・五・七というくぎりをつけていわってきました。また、この日に「千歳あめ」を食べるのは、「千年も長生きしてほしい」というねがいがこめられているといわれています。

すすはらい　家中の一年間のよごれをきれいにし、新しい年をむかえるじゅんびとして、十二月十三日に行われていました。